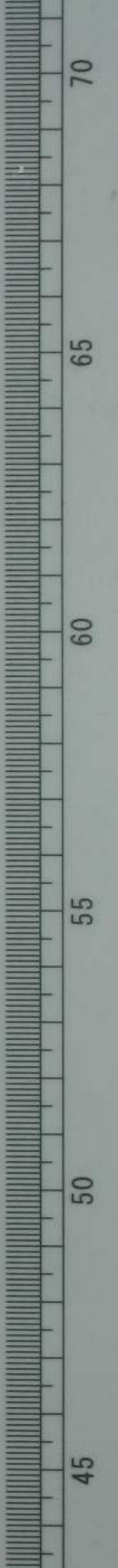


先驅者としての藤村

蒲原有明稿



本間文庫  
文庫 14  
A 176







先驅者としての藤村

蒲原有明

小諸から東京へ  
 小諸の使者でもあるやうにこつそりと出かけて  
 きた。それと一年に二三度より多くはなかつ  
 た。東京に著くとすぐ宿泊の家を知らせかあ  
 つて、久振りで會つて話をしてみたいといふ  
 のである。よく本郷元所邊の西路次の陣上陣  
 で、薄暗い閑静な座敷が小諸からのこの珍客



を親しみ深げに迎へておた。肘掛の出窓に竹藪  
 や當年昔月をどかつつよしと列べてある、さう  
 いつた場所であらうか。かれはわたくしの訥ねて  
 くるのを待つておた。  
 ここにかれといふのは、實は藤村にほかに  
 らないのかうと打聞けり、それ、そんならに  
 あけすけに口をきくもので、はなはなと却てこ  
 ちうかたしなめられでもするわうに、藤村は  
 淺間高原の風格をひつそりと胸中に秘めてこ  
 の亂雑な都會に出できたのである。ここに  
 くれぬ物々しい下町、それ下極めて物馴れた、落  
 着きがあつると同時に相應な横道さをも心得  
 ておたかれの慣用手段がうか加はれた。

わたくしは最初は何か内密な話でも聞かれ  
 了のかと思つた。さう思ふのはわたくしのう  
 ぶさからである。わたくしは知覺のぼたら  
 きのある自分自身で笑つてやらなければ  
 ばならぬ。藤村は創作上の経過をすら容易  
 に打聞けはしなかつた。かれにはいつて終つた  
 ぬの考があつた。それは機会あるごとくに

藤村問歩 一月號 イ印



新知識をどのわうにしても押下りとううとする  
 こと、そこには<sup>負</sup>責のやうな執意をこめてお  
 た。さうするには~~断~~かぬてから考へつづけ  
 て<sup>時</sup>て周到に準備された計畫があつたと云  
 つてよい。

對談の間に、藤村は茶をいれかへにきた  
 主婦に向つて、「あのお頼みしておいたものは  
 しう揃つたむせうか、さつそくやりたいので  
 すか。」それにはさうなさいますか。ちやう  
 どあたうしい粒をろひの牡蠣がありました。」

主婦はさういつて立つて行つたが、すい十能  
 に炭火を盛つてきて、それを火鉢につぎたし  
 て、鍋をかけた工合を見る。主婦はこれだけ  
 のことを牛まめ<sup>丸</sup>に運んでおる。  
 やがて鍋から味噌のほひかほのかにた  
 つ。藤村は山國育ちだけあつて味噌を使った  
 料理を好んでおた。それについてかいいお記  
 憶が一つある。多摩川の對岸になつておる白  
 草まむ<sup>丸</sup>~~丸~~試め<sup>丸</sup>花見かてうに足試めしをした  
 ことがあふ。連中には馬場孤蝶と交つておた



とおしふ。府中の旅館で申休みをして、大勢で晝食をとつた。また季節節のしをかき、  
 中の若鮎はなかつたらう、何かほの川魚を持ち  
 合せた。おろしといふのは、その水はそれを  
 持つてきて食べたかよかうと会議に及んだ  
 か、結局藤村の発言は魚田にしてはもうふこ  
 とに決まつた。よく御敵餅の話が出たが、  
 この魚田など藤村が味噌に對する執心をばつ  
 きりさせておろす。  
 さうかうしておろすうちに、その日のもてな  
 しの牡蠣鍋は程よく煮えて、鍋蓋をとると  
 白い湯気が漂ふとして陰氣な部屋をあたた  
 める。たしか年の暮の寒い日であつた。  
 藤村はゆつくり箸をとりあげて、好物の海

のにはほひを味はつておろすか、ともすると考へ  
 ぶかく黙つてしまふことがあつた。酒はあまり  
 嗜まぬ。それわたくし一人が酔はさぬ  
 う。頬が熱くなる。好い氣もちで、つい餘計  
 なことまでしやべつた。藤村はどうかといふに  
 かかには話を聞き出すにしろおのづから順序

藝林同歩 一月號 イ印



があつて、無駄を省いて直ちに要領をつかま  
 うとするところがあつた。イブセの野鴨はど  
 うの、ホルグマはどこの、シモツの象徴  
 派運動はどこの、フはオベルはどこのと、お  
 よそさういふやうな題目につけて、仔細に、  
 しかし表面はさりげない風に質問してゆく。  
 知友間の新知識について、その報告をおめ  
 らん。うつつかりしてゐるとこちらがまごつ  
 いて、あとでその矛盾を訂正しなくてはなら  
 なくされる。まさうで検事の之所に呼び出され

て訊問をふけり被告といふやうな格好で  
 あつて、果はそれに加断になつて一切を哄笑の  
 うちにまぎらしてしまふ。  
 藤村は、わたくしばかりでなく、花袋をい  
 はし會つて、さまざま意見や静かに聞い  
 てゐて、聞くわけのものを雑誌の野の新収  
 穫として、それを糧として、四五日するとま  
 たお話へ歸つて行く。かれはそれこの高卒の向  
 氣を吸つて一修行するのである。  
 わたくしは藤村が無類の愛煙家であつたこと

藤村問歩 一月號 一印



11. 12

0.

今語るおに忘れたるうにしておかうとした。  
 今ほ好い序である。とは云つてもかれの喫煙  
 はさほど趣味のあつたのはなかつた。教員澤  
 幸輸入品ない強と顧みあつた。それでお  
 て教員印を一回百本くらおは平氣でかたづけ  
 た。あつたは煙草が甘からうはあつた。あめ濃  
 とまた、はたのものには思はせた。あめ濃  
 口~~口~~うげの間に絡まつて、煙はいつ見ても  
 悠々たるものがあつた。藤村は喫煙によつて  
 絶えずその氣分を解放して楽しんでおたので  
 あらう。そこには甘いもつた。あううは  
 かない。そして寛大な、それかといつて何ひ  
 との物事を見逃さずこととない眼と、竹筋の  
 通つた強い鼻柱と、顔面の色の白さが調和し  
 て、そこには示されたものは弛みのない意志の  
 力である。弱味を決して見せまいとするそこ  
 りに、木曾の大家族を率ゐてきた先祖以来  
 の精神が、この新時代の藤村にも正しく傳へ  
 られてゐる。か水がそれと知るや知らずや、  
 恰も天宮であつたかのごとく振舞ふことのでき

櫻林間歩 一月號 イ印

(來)



あり。ここで小諸の方の教員生活も清算され  
 た。小諸を出るについては、作家生活への精  
 進のほかは、錯雑した理由もあつたらうが、  
 またもとの野人となつて都會の砂塵を浴び  
 了、それか却つて藤村にはあさはしくさへ思  
 はれる。まうは思ふものの、いよいよ出京と決  
 心し、西大久保に卜居したといふ通知はわた  
 く、しむ教馬かしたのがある。  
 さき述べてきたやうに、おしては街路筋であ  
 つて、そこを朝夕兵隊も通れば、荷車も頻りに

藝林間歩 一月號 一冊

のもそのためであらう。  
 ぶと、**新生**の竹節子がおしかけに浮ぶ。  
 わたくしが節子をおしめて知つたのは、藤村  
 が**長い闘争**の結果完成した**破戒**の稿を  
 携へて東京に戻つてきたときである。落ち着  
 いた家は西大久保も鬼王様で知られた神社の  
 近所で、街路筋に向つて建つておた、また新  
 しい貸家である。貸家探しにも他を煩はさ  
 ずおにかれ自身でまへてを準備しておいたので



痛了。しかし、さすかば郊外にけあつて、空  
 氣はどこか閑静で健康なほりを運んで  
 おろす。そんなところに、かれは口癖に云つて  
 おた仕事場をそのを建てましておた。それ  
 は床を地面まで下げて、塵敷からほ（段路）  
 降りなければならぬ、いはば窓のやうな構  
 造である。その頃まで、しにせの履物店で見  
 かけたのと大體同様のものであつた。店の片  
 側を仕切つて、窓に見えるところ、~~西~~にそんな  
 窓を設けて、晝でも暗い時はカーテンを掛け

て、職人が二三人坐つて、桐の杵を削つ  
 たり削つたりしておた。藤村もさういうた記  
 憶から思ひついたりあらうが、鬼も角も大層  
 を自慢であつた。かれは決して田舎の臭味  
 振り落さずには歸つて來なかつた。そしてさ  
 ひびびとして張り詰めておた。そのけはひに  
 は、ぐぐぐとつじておて依然たる舊阿蒙に過ぎ  
 なかつたわたくしどもは耻ぢて、~~七~~耻ぢを足ら  
 なくした。そこでかれは最大の家庭

鷗村問歩 一日鏡 イ印

對して



的 不幸に詔衣はれたのであ。いたいけな小使  
 たちは次々と病院へ送られた。まさか鬼王様  
 の祟りもあまりに加へ、この宿命的な病魔は  
 には、かな藤村も手の出しがなかつた。  
 病魔は小使たちをいっせいに慰みしめとして、手  
 玉にとつて具府に連れなして行つたのはな  
 かりうか。悲惨とて酸鼻といはうやうかな  
 い。  
 しかしわが藤村であ。かれは屈托しな  
 のた。顔色は平常と少しも変らぬ、蒼白に

17

えかへつたうちには鍛錬した鋼鉄の強時が見  
 ええわた。不幸は不幸だが一家二姓に限られた  
 悲みに過ぎない。衝突は大きいか、この一  
 和事のために相貌まじくづすやうな不  
 はしたくない、さういつた風度か感心せられ  
 る。  
 わたくしが訪ねて行つた(をり)には、夫人は  
 (病院)看護に付き切りで、(そのための)病院に泊り込ん  
 だわるといふことであつた。その留守を(お即)  
 子が来て世話をしてわたしのと見えた。わた

さん

藤村問歩 一月號 印刷



くしは恐らくこの日に節子さんとはおしめて知  
つたのであろう。  
度さきかど向うは四ツ目を隔てて横かつた  
狭き道である。藤村はわたくしを誘つてその夢  
煙に出でて行つた。穂がよく出揃つて、莖だけ  
が胸にとびく。薫風といふのであろう、そめ  
吹く空気の申す日光に蒸された陽炎が揺らめ  
いておる。烈しいかまた親しくもあるにほひ  
があたりには漲りわたつておるのであらう。その  
中に浸つておると、それに直接を感じ見ると

その豊かな郷土愛を受用する。とどのつまり  
わたくしは酔はされて恍惚となる。  
さういふ零團氣に絡まれて何を話しあつた  
かはわたくしの記憶にない。そこへ節子さん  
が「もうお晝です、紅度とてさましいから」  
と云つてわたくしたちを迎へにきた。藤村は  
節子さんと肩をならべて踵をめぐらした。  
二人とも黙つてゆつくり歩いてゆく。さう  
その後わたくしが節子に會つたのは、藤村

藤村問歩 一月説 4印



運命にはまりこんで、家庭のことでは困り  
 切つておる。二男の鶏ニや預かつてはくわ  
 いか。もしやいむやうな事かあるは養子に  
 あつた。いいといふのがある。さういふ話か  
 あつたので突然といわけてはなかつた。ま  
 だいはけな。鶏ちゃんほ、あまりにし違つた  
 境界にのねこまねたのでむつかつておる。節  
 子さんはやんちや坊をいたはりなから、藤村  
 の封書をおたくしに手渡した。封書には島  
 崎一家の戸籍謄本が入つておた。おたくし

加自慢の仕事場を捨てて、浅草の花柳街の  
 特種の隠匿性のある、そんな場所を選り  
 好んで引移つてからのことである。  
 夫人はそこを幾人めかのお尻をした。殊  
 の外難言性であつたので、振れて、程もなく  
 亡くなった。そのあとを節子さん引受け、  
 ちやてややつておた。その節子さんが、或る  
 日、鶏ちゃんを連れて山の手のおたくしの家  
 も訪ねた。藤村の二男に生れた鶏ニさんの  
 ことである。藤村のおたくし前に、こん



は藤村のあまりにも周到な用意におどろくと  
 としにその~~虚言~~虚言の~~処置~~処置に思ひ惑つた。  
 鶏ニさんほまづかまかつた。日か経てはま  
 づかうといふ期待さへたきまかつた。家族の  
 ものもその取扱ひに手も焼いた。そこには先  
 險さへありた。藤村の氣持を考へれば氣の  
 毒としおしほふたが、當分預るといふわけに  
 も行かまかつたので、すつかり~~断~~断つてしまつ  
 た。藤村はわたくしの取つたこの~~虚言~~虚言につい  
 て、その後何ともいはずかまつた。わたくしに

はその沈黙の苦衷がおしひやく水了。  
 それからしばらく経つて、~~柳橋の~~新井町を訪れた  
 と、~~ボストン~~ボストンエルの話か~~あ~~あ。その頃英  
 譯が出たのである。散文詩のうちはシモズクの譯  
 であつたが、詩篇のうちは藤村は詩篇のうら  
 本のか冊子であつた。藤村は詩篇のうら  
 日旅への誘ひに心を奪はれた。あ  
 れなごはとうたらうと云ふ。わたくしはさう  
 としに、あ  
 れなごはとうたらうと云ふ。わたくしはさう  
 としに、あ

藤村間歩  
 一月號  
 イ印



25. 26

君

君に似しかの園に！

愛して死すも

こんな書き出しである。藤村とくはどの時すに外遊の腹を決めておたのであらう。それとそれとなくボオドレエルに抱いて語つたものであらう。それをそれと悟らなかつた鈍感にわたくしは愛想をつかして

佐藤朝臣譯『悪の華』

藝林問歩 一月號 4印

東京出版株式會社編輯部

24. 25

2711

折角藤村が提出しかけたこの謎の問題をこころなく以逸らしてしまつたといふ形に

おろの口旅への誘ひにははかういふことが

いとし子よ 戀人よ

相心ひみよ かまたに

行きてともしに暮す愉しさも！

のどかに愛し

きつと日本酒

機知のたま

東京出版株式會社



か水の外遊は實現された。遠い旅( )か  
 う空しく戻つてくる筈ではなかつたうしいが  
 か水は巴里で第一次世界大戦の飛沫を浴び  
 たのである。餘儀なくされたが、  
 藤村が再び郷  
 國の土を踏むことの出来たのはむしろ自然に  
 あつた。  
 藤村に對する世間の批判もおさまつておた。  
 さうして( )新生の告白が公にされた道とひ  
 らいておた。

その中にあの關東大震災が突如發した。  
 わたくしは鎌倉から追はれて静岡へ移つて中  
 くことになつた。  
 そのころ藤村は麻布に住んでおた。あの春  
 底のやうな場所である。みづから( )太富ひた  
 つてみづから救つたか水は、婦人雑誌を刊  
 行して、その編輯に専心しておた。わたくし  
 は別水に行つた。かれ( )が歸朝當時の白金以  
 來めつたに會はずかつたので、久しぶりに



茶屋下煎茶を買つたと思の外飲めなよ、それ  
 からは他の店からは一切買はぬことにした、  
 茶好きのかれはさうもいつた。両側を仔細に  
 尋かめて一々藤村橋の観察を施す。二人は  
 橋に上りてふと、<sup>50</sup>あくのが無上の悦樂のやう  
 に見えた。そこにはいつに變らぬ藤村が  
 た。

島崎楠雄さんが今年になつてから書いた  
 天の回想のなかには、矢張りわたくしと同  
 じ路を鶴二さんと兄弟して連れ行かれ、看

藤村問歩 一月號 4期

東京出版株式會社編輯部

であつた。藤村はわたくしをおしては連れ出  
 した。その夕方の光景が眼にはつきり浮ぶの  
 であつた。

藤村のなかれの住居から芝公園の方に出か  
 けたには、<sup>50</sup>静かな裏町を通ることにな  
 了。森元へ出た所並みの路である。車を止め  
 つたに通らぬ藤村はこの路がすきたとい  
 つてゆつくり歩いてゆく。<sup>50</sup>これは新屋敷、店  
 が古いおけに中々良い質の紙を賣つてゐる。  
 そんな注意をあてへるかと思へば、ここの甚不



種々雑多な断片が積り積つておびただしい量に上る。

藤村は故に崇永の価値を知つておいて、それを實行した。さう思つて見れば、かれの日常の一言一句は、この故に崇永の光につつまれておた。やはりそこに裏路を道違する理由があるのがある。

そこに持前のエシツクがおのづからの香氣を分派する。

藤村はこんな時よく常識めいた解説を下し

櫻井間歩 一月號 イ印  
 一月號

東京出版株式會社編輯部

杖やう業體について試問やう説明やうに書かれたけられた記事を読んで、君たちもやうなたかと思つて、わたたくしは口邊におのづから微笑の上のものを禁じしえなか

藤村は文藝の裏路をよく知つておた。そこでほお軽く、童話を書き、教訓を垂示する。たまたまさういふものを讀んでゆくとき、そこに人生の隅角がひびく芝つておるのを見出す。かれはえんを樂んで書き、書いさしておた。

三

邊



式

た。節制であり中庸である。かゝるわが形  
式的にそれを説いたのはあるまい。自己の  
非常識が感得さればさうほと常識を反切切  
したのであらう。

わたくしが『若菜集』に接したのは、九  
州の田舎にしばらく行つておて、  
がばであつた。田舎にわたせおかどうかは知  
らぬが、『若菜集』を一讀するにさう、その  
解釋に骨を折つた。今時の讀者なら不思議  
議がさかしくない。その不思議がりがたは

2. 33

た

相像の不思議であるが、わたくし不思議は  
實體にづきまをたのむあつた。何が判  
らぬといつて、その集の全體の言葉本體  
が判らなかつたのである。藤村は極めて素朴  
に歌つておる。その素朴さは自然心から溢み  
たしておる。つまりわたたくしにはその  
言葉の自然さが判らなかつたのである。わた  
くしはその事に氣づいて藤村の言葉を分解し  
て見た、そして語法の組合せを仔細に検討し  
た。わたくしが言葉に對しての修練を詩の

33. 34



眞木君との認められたのしきういふところには附  
してねる。中々あり。この不言の賜物を享受し  
して、わたくしはこれやいしかれのエリックの  
光臨かと考へるにはおもうべきありぬ。

藤村には形而上學がない。藤村にしてしを  
かあつたなら、夜明け前凸の後半は大急行  
列の出のよりと別方面の展開を見たらう。  
惜しいことにはそれがかつた。

皇神の通傳ふかに 眞木ふかく文の林を  
三たごる雅士

眞木君短冊に書かれておて、正樹とある。

藤村の眞木君の筆蹟である。歌は眞木君  
てしをためられ、體は神經質的である。わ  
たくしはこの短冊を久しく珍藏しておた。  
雅士とあるのをみれば、いと訓んでおた。多介  
平田篤胤を詠んたものであらう。平田  
は自然派の神道者流である。その熊子問は自然



中から俗情から観た自然のやうに雑然  
 としておたの。それが形帯また理念を以て統  
 一されておたかつた。正樹翁の神道もその平田  
 仙翁をも更に簡にしたもの(あ)に過ぎぬやうな  
 ものであつた。藤村にもその流儀  
 があつた。然に對する解釋は教養の結果  
 深くはなつておたが、信仰といふものは正樹  
 翁から譲られてはおたかつた。啓蒙時代の  
 風土に従つて、ルソオに関心をもちつておた、  
 自然の生活を忠實に生活するも責務とし

ておたのひあつた。藤村は自然の絶対性を認め  
 てその統一世界を自覺して(あ)おたとは思は  
 れない。その間隔を充たすものがそに一つ  
 あつた。それが大家族の家長に受け傳へた  
 エシツクである。わたくしはわたくし流にさ  
 り解釋して、藤村を觀る眼を新たにした。  
 (あ)わたくしは(あ)前(あ)に述べたやう(あ)にして、  
 (あ)から(あ)公園に出た。  
 公園では評判の花の茶屋に案内された。何

藝林開歩 一月號 一編

東京出版株式會社編輯部

(あ)の答



か飲物は飲しくはなにかと聞かれ、わたくしは遠慮はしなかつた。それはジエジエヤニエヤ加よからう、竹腰打はさういつてすくはあつらへた。この飲料の名をわたくしは初歩の時分に知つておた。ジエジエヤといへば小使の口拍子に乗る。味水のは今は加ほいめでである。上品を巴里好むとあるやうな飲ものである。實のところ、わたくしはスイスキイの一杯を望んでおた。後にはは堂の隅にしろへうれた棚の上で對座して日

本酒をよばれた。花の茶屋とは稱しなから設備は支那趣味であつた。わたくしは日本酒の幾杯かやをねて、食後は快適な酔味をしばらく弄んでおた。そして藤村とわかれ、歸途にツイた。信濃町の驛に駆け込んだころは、季節はつねの驟雨が外傘をさすの肩をひいたたいとおた。藤村との永久の別れは、いふに神のみをしろしめす。いふに



藝林間歩  
一月號 一印



藤村を記念する會堂の落慶式がこの月の  
 十五日に郷里の木曾馬場に挙げられた。わ  
 たくしは例により身體の不自由さから出掛け  
 らずまかつた。残念であつたが致し方ない。  
 會堂の設計は建築界切つての新知識の大家  
 の手になつたといふ。藤村は新要素の規律と  
 重んじた。會堂は時節柄もあり、素朴のう  
 ちに藤村を立體的に表したものにちがひな  
 い。わたくしはその會堂の育かた藤村の詩魂  
 が降界からよろこんで降下してくるやうに思

甲) 藤村の一生は志願  
 こゝへに仰ぎ見ねばならぬ。

藤村の一生は志願  
 者としての一生であつた。そこに苦惱しあ  
 りは愉快もあつた。

昭和二十三年十一月末日

42



